

【東の今昔】

東の農村生活

②

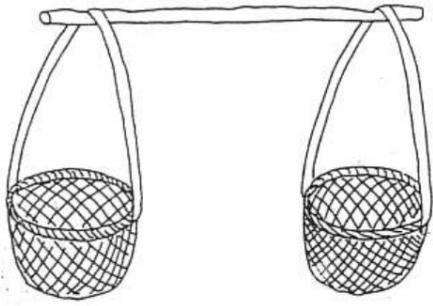
『田植えの話』

苗取り

代掻きが全部終り金肥(化成肥料)も打たれ、畔ぬり(漏水と水位を保つための畔に土につけて手鋤で壁のように塗ること)が済むと、いよいよ明日は田植になる。田植の前日に苗取りをする。先づ岡苗代に水を張る。ねえとり籠(苗取籠)又はねえとり台、ねえとり盥を置き、その上に腰を下ろし、腰をかがめて両手を前に出す、苗を二、三株ずつむしり取る。手頃になると両手の苗を合せ泥をすすいで、ねえばと称するわらをクルクルと二回まわし束ねては前に進むのだが、抄の行かない根気のいる仕事だ。腰は痛くなる、股はつつ張る。ことによるとこう手といって手首が捻挫みたいになることさえある。

天気の良い時でさえ辛い。南風の強い時、雨がざんざん降る時など、まして着物が下から濡れて来たりするとやり切れない。どんな悪天候の時だって止める訳には行かない。苗取り終わると思わず「よかった。」という言葉が出てしまった。

苗運び



取り終わった苗を本田に配分する作業だ。近くの水田には皆で左右の手に十二、三束ずつ下げて本田全面に配布するのであるが、遠い田は苗籠という担い籠に入れて運ぶ。農道や広い畔道を歩くのさえ天秤が肩に食い込んで来るのに、よく耕された上に水を張ると、歩きにくいことこの上なしである。ヨロヨロピシャピシャ時になると籠を田に置いてしまうことになる。こうなると苗が水を含んで重いこと重いこと一苦労である。

いよいよ田植

地ばしり 早乙女が田植えするのに最も良い状態になるように世話をするのである。土を平にしたり、苗を配ったり、余れば取ってやったり、不足すると補充してやるのである。正に水田の中を走り廻る程だ。正に地ばしりである。

縄張り 早乙女にきれいに田植えをさせる為、縄を張ってやる人である。細は細い針金を三、四本繕る。植える所には赤い毛糸がつい

ている。先づ親縄(たいしやともいう)を張る。これを基本として尺棒に従い向う側と呼吸を合せて「ホイッ」「ほうーい。」と一本一本縄を進めていく。この縄張りが上手かどうかによって田植の能率が大きいに違った。



「田植え」 作詞 井上 越 作曲 中山 晋平

そろた出そろた さなえがそろた
 植えよう植えましょ みんなのために
 米はたからだ たからの草を
 植えりゃ こがねの花が咲く

そろた出そろた 植え手もそろた
 植えよう植えましょ みんなのために
 ことしゃほう年 穂(ほ)に穂が咲いて
 みちの小草(こぐさ)も 米がなる



「えー」ということ 一家の人数だは抄(はか)どらず重労働なので何かのつながりを頼りに共同作業をすることを 「えー」という。田植には方々で「えー」が作られる。本家と新宅、近所同志、気の合う友達などである。だから田植は大い多人数でやっている。自分の家が終ったといつて終ったのではない。「えー」が終ると「良かったのー。」「お世話になりました。」と心から感謝のことばが出るのである。

すーとめ(早乙女) 小学校唱歌に出ていた田植の歌は誠にのかな農村風景を感じさせる。それは外から田植えに関係の無い人が見た場合で、実際の労働に従事している早乙女(みんながすーとめといっている)にとつてはそれはそれは重労働である。

朝は薄暗いうちから一株目を植え始める。およそ四時ちよつと過ぎだろうか。田植えにかかる時間が遅いと情農だといって笑われるし、恥かしいのである。勿論、あさはんめえ(朝飯前)である。二、三株ずつはり縄に従って横に歩きながら植える。手の下りるのが早い人も遅い人もある。それをうまく調節して一緒に植切つて縄をす早く次に送るのが、縄張りの腕前である。そして朝飯までに相当の広さを植える。そして日没までこの繰返しである。一日中下を向いているので体は疲れる腰は痛む、目も張れぼったくなるのである。

おさなぶりとまんが洗い 何といっても田植は農家にとって大切な作業である。だからこそ田植のことを「農」といっている。「これは農めえ(前)にやらなくちゃ」「これは農過ぎにすべえ」のように。

田植が終った喜びは格別である。その祝をおさなぶりといって酒、肴、煮物、漬物、赤飯、うどんなどを用意し、一夜「えー」の人全員で飲み、食い、談笑して又来年を約束して別れる風習があった又、これと同時にまんが洗いの行事もあつた。



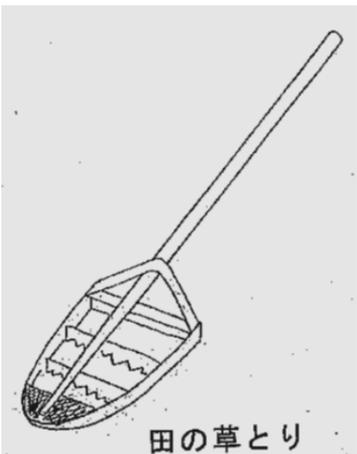
田の草取

農具に苦勞をかけたのでそれに感謝する意味である。う。又は泥に汚れた馬鋤(まんが)をきれいに洗い酒をそそいで感謝するのである。

この様な一連の田植作業も、近年農法が変わって直時(ちきまき)する人もあり、機械化され、機械植する家が多くなり昔ながらの田植風景は殆んど見られなくなつてしまつた。

田植が済んで十日も過ぎると、もう田の面に雑草が生え始める田の草取りの時である。道具の無かつた頃は両手の親指以外に薄い鉄板(トタン)板を丸めて作つた爪をはめる。水田に四つんばいになって四株か五株位を受け持ち土をガシャガシャ掻きまわしながら田の草取りをする。これが一ばんご、三ばんごまで十日おきにやつた。

その後田の草取道具が普及し、子供まで動員して左の道具を持たせ稲株の間をガシャガシャと縦に土を掻きまわし、もう一度横に掻きまわして草取りをする。田の中を十文字に歩き廻ることは随分と疲れることではあるが、これをしないと秋の収穫に大きく響くので、どこ



穫に大きく響くので、どこの家でも子どもまで動員するのである。然し、子どもにとつては甚だ迷惑のことなんだが何とも致し方無かつた。今は化学薬品の除草剤の効果がすばらしいので草取り姿は見えない。

故 牛込 巨さんの『東の農村生活』から引用 へつづく